

山口県小学校長会報

発行所
山口県小学校長会
代表者 山本晃久
校長会事務局
山口市大手町2-18
☎ 083-925-2919
FAX 083-925-6776
印刷所
大村印刷株式会社

教育改革と校長のマネージメント

「改革」と「踏襲」の狭間で



山口県小学校長会 会長 山本 晃久

一 はじめに

国による様々な教育制度改革、それらを受け、地方教育においては、それぞれが特色と成果を見いだそうと必死になっている。矢継ぎ早に示される教育再生実行会議の提言の様子から察するに、教育改革は、今後ますます拍車がかかるであろう。

若いころ「止揚」という言葉に出会った。「矛盾する概念を、対立と闘争の過程を通じて発展的に新たな概念に統一すること」である。

「改革」に相對する言葉は「踏襲」である。これら一対の概念を対立させたところに生まれる概念が、マネージメント（経営）であると考ええる。

私たち校長は、改革に押されながらも、実は、教育現場として変わってほしくない側面を持ち合わせていることも痛感している。

今更述べる必要はないのかもしれないが、「改革」と「踏襲」がマネージ

メントに「止揚」するため、特に重要な点を、紙面の許す範囲で述べておきたい。

二 「ねらい」で賢く

本年度が始まり、最もよく耳にする言葉は「学力向上」と「コミュニティ・スクール（C・S）」「地域協育ネット」ではないだろうか。どの学校においても、課題として取り組まれているということがある。

今後、社会が教育再生実行会議第六次提言において示されている「全員参加型社会」「地方創生」のとおり向かうとするならば、学校は、地域や保護者、関係機関との関係がいつそう緊密になるであろう。緊密になると言うより、「入り乱れる」と言った方がよいかもしれない。

これらの渦の中で、これからは、校長自身が地域振興のマネージメントにもリーダー性を発揮しなくてはならな

くなるかもしれない。

しかし、私たちは、小学校の校長であり、先生方とともに、未来を担う子ども達の育成を一義としていることを忘れてはならない。

つまり、様々な施策展開や組織づくり、活動展開において、それらの「何がどのように子どもに影響するのか」「子どもにとってどのような役に立つのか」、逆に「子どもにとって、あるいは学校にとってのリスクは何か」といった点を見逃さず、常に「ねらい」を明確にしておく必要があるということである。そして、その「ねらい」に基づいて、地域にある学校として、先生方や地域に理解を求め、お互いが賢く取り組む必要がある。

三 状況の把握から切り口を

教育に関する国や地方の動向を観ると、「水準の確保」の言葉の下に、どの地方、どの地域、どの学校をとらえても均質の、いわゆる金太郎飴を創ろうとしているように思えてしまうのは私だけだろうか。

学校はこれまで、特色ある学校づくりを進め、他と異なる取組を推進してきた。その特色はそれぞれの地域や保護者の実情を背景として、当然のことながら様々であり、それぞれが深い歴史と伝統をもっている。

従って、仮に学力向上やC・Sの取組を進めるとしても、そのスタートの状況は様々であり、同じ方法論をもって取り組もうとしても、ひずみが生じかねない。

私たち校長は、このことを自覚し、地域や保護者も含め、学校の状況をしつかりと把握するとともに、どこに切り口を設け、どの手順で「水準の確保」に向かうべきか、ビジョンを丁寧に描き、周囲に説明を行う必要がある。

四 具体的提言ができる校長会に

全国から二六〇〇名余りの校長先生を迎えて実施する、第六十七回全連小研究協議会山口大会が十月に迫った。今、全国の教育が動いている。その様態は、各道府県ごとに異なっている。しかし、めざすところは、「未来を担う子どものため」である。

五領域十三の分科会における研究課題は、まさに、二、三で述べたところの、私たちが教育の現状から求めようとしている教育実践の切り口であり、ねらいそのものであるといっても過言ではない。

短く限られた時間だが、全国の校長先生方と膝をつき合わせ、腹を割って、「志を高くもち 未来へ向かって 共にたくましく生きる子どもを育てる学校経営の推進」について語り合おうではないか。

そして、「改革」と「踏襲」の狭間で、学校経営の実践研究を通してこそ生み出すことのできる、校長ならではの具体的な改善策を、現場の声として、教育委員会や文部科学省に提言したいと考えている。

県内の校長先生方の熱き思いが一つになり、山口大会の成功に結びつくよう切に願っている。